

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	模擬授業で体験する英語の授業過程：生徒の学習活動を支援するツールを取り入れて
Author(s)	又野, 陽子
Citation	LRT研究紀要, 10 : 21 - 31
Issue Date	2024-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055302
Right	この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認、ご利用ください。 This is not the published version. Please cite only the published version.
Relation	



模擬授業で体験する英語の授業過程—生徒の学習活動を支援するツールを取り入れて—

又野 陽子

1. はじめに

LRT 令和5年度第1回セミナーでは、学校現場におけるデジタル化がもたらしているものに関連して研究テーマが設定された。明治5年の学制発布以来、教科書（教科用図書）の位置付けは学校教育において極めて重いものであり、デジタル教科書の定位（位置付け）について考えることは意義のあることであるということがその背景である。

デジタル化することは何をもたらすのか、何をもたらすことが期待されているのか、これまでの紙媒体の教科書ではいけないのか、といった事柄を本会員、教職課程の学生、小中学校の現場の教職員の方々と確かめる機会をつくること、そして、教育実習以外に現場の様子を知る機会があまり多くないと思われる教職課程の学生に対して、授業の具体を体験する機会を提供することは有意義なことである。そこで、中学校の現場で日頃電子黒板を使って展開している授業の流れを実際に示し、指導者用デジタル教科書の活用方法について理解を深めることができる講演内容にしたいと考えた。前半は聴衆の方々に模擬授業形式で実際に授業に参加していただく演習、後半は前半の模擬授業とも関連させながら、デジタル教科書の位置付け、指導者用デジタル教科書の教科ツール活用の利点、ICT活用の際の留意事項、これからも変わらず大切にされるべき英語の授業づくりの本質についての講話を行った。

2. 模擬授業（演習）

映画で使う clapper board^(註1)を用いて、模擬授業開始の合図として“Are you ready? Class is about to start. Action!”、模擬授業終わりの合図として“Cut! This is the end of the class.”のかげ声を参加者の代表の方に前に出てかけていただいた。生徒役になるという雰囲気づくりと、後半の講話との間に区切りをつけることができるという効果があると思われるため、ワークショップや大学の講義等で模擬授業を行う際に使用している方法である。中学校における英語の授業や小学校での出張授業においても、対話の発表等の際に教師が合図を出す道具として活用している。

教材、学習目標、指導細案を記したものを参考資料として参加者に配付するが、資料に目をやることに終始するというのではなく、参加者の集中と参加を確保した授業運び（例えば、インタラクションに全体の参加者を取り込み、さらに個にもどしたりするといった展開）により、生徒役として授業へのアクティブな参加を促すようにした。

授業開始の第一声を大切に、全体の注意を引きつけてしっかり発声をする場を設けることを心がけた。自己紹介文に本時の言語材料も取り入れて、授業開始から授業終了まで一貫して一つのテーマ、トピックで授業を展開していくようにした。例えば、人[もの]がだれ[何]なのかについて、たずねたり答えたりすることが本時の学習目標であるため、自己紹介の段階から、絵カード（バス、列車、自転車、自動車の絵が少しずつ見えるように工夫したもの）や飛び出す絵本^(註2)を随時示し、“What’s this? Do I come to school by bus? No, I don’t.”や“Who’s this?”と参加者に問いかけたり答えたりしながら学校に着くまでの交通手段や好きなキャラクター等を紹介していった。

小学校外国語活動（Let’s Try! / Unit 8 What’s this? 及び Unit 9 Who are you?）の復習として、シルエットや写真を提示してシルエットクイズや人物当てクイズ（What’s this?/Who’s that?）を行った後、めあてを確認して文法解説動画を視聴する時間をとった。

小学校の社会科でも扱っている地図記号をパワーポイントで示しながら Question-answering（問答）^(註3)をスピーディーに行い、その後の Jazz chants につなげていった。Jazz chants で登場する地図記号に関する問いと答えの文を Question-answering において十分に聞かせたり、「即座に」「正確に」言えるように口慣らししておくことにより、自信を持ってリズムに合わせて歌うことができる。

次に、ストーリー・スライドを場面ごとに1枚ずつ提示しながらオーラル・インタラクションにより教科書本文（校内に掲示されている学校周辺の地図を見て教科書の登場人物の男の子と ALT の先生が話している場面。対話の途中で男の子のクラスメートが登場する展開）や新出単語を導入した。学校周辺の地図が示されているスライドを示して地図上の地図記号についてのやり取りを行う際も、事前に Question-answering や Jazz chants で豊富に練習しているのでスムーズに行うことができる。参加者（生徒役）とのインタラクションを通して新出単語を導入し、ワードカードを提示して、列ごと、個、全体、と変化を持たせてリピートを行った。神社の記号に似た記号がアメリカではピクニック・エリアを表すという内容をわかりやすく示すために、ピクニック・テーブルの黒板画も描きながら参加者とやり取りを続けた。映像を視聴して対話全体の流れを再度確認した後、フラッシュカードによる新

出単語の確認と練習を行った。フラッシュカードの提示速度は練習の回を重ねるたびにスピードを上げていき、その後の音読につなげていくようにした。

音読の際は、Choral reading、Choral-Individual-Choral reading、Buzz reading、Individual reading、Read and look up など多様な練習を取り入れることにより多量の練習を行うようにした。

本文音読後は、ペアになり教科書の挿絵にあるような地図を見ながら地図上の地図記号について尋ねる実際の対話を練習し、新たなペアで前に出て即興で発表を行う機会を持った。ALT 来校時に自分たちが住んでいる町の地図を示しながらこのやり取りを行うことができれば、リアルな言語使用につなげることもできる。

ペアで行った対話を4線上に正しく丁寧に書くことにより、学習した内容や言語形式のまとめや再確認を行った。最後に振り返りシートにより、準備 (Preparation)、聴く姿勢 (Good Posture)、声の大きさ (Big Voice)、積極的な発表 (Volunteer) の自己評価と今日学んだこと (Learning Outcome) の記入を行った。

“Did you have a good time?” の呼びかけに “We did!” の応答を得て、clapper board を使った合図で模擬授業を終えた。(授業の詳細は、[資料1 模擬授業の具体]を参照)

3. 講話

3. 1 デジタル教科書の位置付け

まず、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点からデジタル教科書の位置付けを確認してみたい。今回改定された学習指導要領において、情報活用能力は、言語能力、問題発見・解決能力とともに、学習の基盤となる資質・能力の一つと位置付けられている。

文部科学省 (2020a, p. 80) を参照すると、情報活用能力は、「各教科等の特質を生かし教科等横断的な視点から育成するもの」であり、「そうして育まれた情報活用能力を発揮させることにより、各教科等における主体的・対話的で深い学びへとつながっていくことが一層期待されるものである。加えて、人々のあらゆる活動に今後一層浸透していく情報技術を、児童が手段として学習や日常生活に活用できるようにするため、各教科等において」コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を「適切に活用した学習活動の充実を図ることとしているものである。」

[資料2 講話資料]①で図示しているのは、文部科学省 (2020a, pp. 80-84) で述べられていることを筆者が図にまとめたものである。この図について文部科学省 (2020a, p. 8) の記述に基づき説明すると、「学習指導要領では、児童 (生徒) が基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができる」ことが求められている。そのためには、「指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること」が求められている。そしてその際に、「情報手段や教材・教具の活用を図ること」としている。「ICT を活用して個に応じた指導の充実を図ることは、子供たちの基礎学力の育成について課題も指摘される中、基礎的読解力などの基盤的な学力の確実な定着に向けた方策の一つとして有効である」という捉え方が表されているものである。

ICT を効果的に活用した学習場面にはどのようなものが考えられるのかについては、一斉学習 (A)、個別学習 (B)、そして協働学習 (C) の3つの分類例が示されており、これらはA1、B1、B2、B3、B4、B5、C1、C2、C3、C4 というように更に10の分類例に細分化されている (文部科学省 2020a, pp. 80-84 参照。山口県教育庁義務教育課 (2020b) においてもその内容が整理して紹介されている)。今回の模擬授業では、[資料2 講話資料]①の図における A1 (一斉指導での教師による教材の提示) の学習場面を示した。画像の拡大提示や音声、動画などの活用場面である。B1 から C4 のそれぞれの学習場面の報告については稿を改めたい。

次に、授業設計の視点からデジタル教科書の位置付けについて考えてみたい。[資料2 講話資料]②の図は、東京書籍 (2015, pp. 2-3) で述べられていることを筆者が図にまとめたものである。授業を考える際、「まず、本時のねらいを確認し」、「次に、学習内容の特性や児童生徒の実態を考えながら『導入—展開—まとめ』の組み立てを考え」る。「デジタル教科書の使い方を考えるのは、この段階から」だと述べられている。「前時の確認をしたい、展開でわかりやすく説明したい、子どもたちの活動を支える材料を用意したい。」一つひとつの「願いが明確になったときに、デジタル教科書を眺めて」、今回の授業ではこの活動をするためにこれを使う、といった「見極めができること」がデジタル教科書を『使いこなす』ことなのだと言われている。

3. 2 指導者用デジタル教科書の教科ツール活用の利点

指導者用デジタル教科書の教科ツール活用の利点については、次のようなことが挙げられると思われる。(これらの中には、従来の視聴覚教育機器の特性 (飯野著・清水改訂, 1985, pp. 200-202 参照) と重なる利点もある。)

まず、「同時に見るといふ…共通経験」、「同時に共通の学習資料や経験を提供できる」という「同時性」(飯野著・清水改訂, 1985, p. 201 参照) が挙げられる。クラス全員の視線が上がり視線が同じ箇所集まるという点は、従来の提示機器や紙製の提示物にも当てはまる利点であるが、従来の紙のピクチャーカードやフラッシュカード

よりも大きく絵や単語が表示できる。「見せたいところだけ大きく見せる」ことができるので、一つの「資料に集中でき…資料の細かいところまで気付きを共有」できることが東京書籍（2015, p. 4）において述べられている。注目すべき箇所が明確になること、そして見えやすさという「拡大性」（飯野著・清水改訂, 1985, p. 200）も、すべての子供たちにとってとても大きなメリットであると思われる。

また、音声と動画が提供できるということも利点の一つであると考えられる。映像により、目的・場面・状況を積みながら言語材料を導入できる。また、題材に関連した動画の視聴により教科書本文の内容の把握が容易になる。外国の日常生活や風景の映像の視聴により現実感や臨場感も味わえる。「外国の風景や物を、動きを伴うイメージで視聴させることで、生徒の興味・関心を喚起すること」（文部科学省, 2019, p. 31）もできる（「空間および時間の拡大」（飯野著・清水改訂, 1985, p. 201）。また、スラッシュで区切ったチャンク単位の音声再生や、音声再生に合わせてカラオケ風にテキストをなぞる機能も、今どこを読んでいるのかを明確にするという点ですべての生徒にとってとてもわかりやすいと思われる。また、活動のモデル動画により活動のイメージを持たせることも可能である。ネイティブ・スピーカーによる文法解説や発音口型を示す動画が発音時のモデルとなりえる。

「繰り返し見せる、途中で止める、音声を消すなど、見せ方のアレンジ」（東京書籍, 2015, p. 4）も可能である。（「繰り返し見せる」ことは、「機械自体に本来備わったものとして、自然に行われる…『反復性』」（飯野・清水改訂, 1985, p. 201）に通じるものである。）

「同時性」「拡大性」「空間および時間の拡大」「反復性」は飯野著・清水改訂（1985, pp. 200-202）において述べられている従来の個々の視聴覚教育機器の特性であるが、デジタル教科書には、そうした「たくさんの機能があり」「すぐに必要な機能呼び出せる」（東京書籍, 2015, p. 2）。

3. 3 ICT 活用の際の留意事項

ここで、ICT 活用の際の留意事項についても確認しておきたい。

まず、時間に余裕をもって教室に入り機器を立ち上げ、機器の不具合への対応も見据えてさまざまな対応ができるように準備をしておくことが必要である。

次に、パソコンを操作して教材を提示する際も、各生徒の表情や反応が見え、それに応じた発話や指導ができる位置に立つ、向きをとる、ということはとても大切なことである。教師は常に一人ひとりの「生徒の表情と反応に注意し、教材が理解されているかどうか、生徒の興味は持続しているか、生徒は疲労してはいないか、等を判断しながらそれに応じた処置をとってゆくこと」（飯野・清水改訂, 1985, p. 295）が求められるためである。生徒の発音の様子や作業状況を確認するためにも、教師の視線は注意深くクラス全体及び生徒一人ひとりに向けられていなければならない。

3つめは、オーラル・イントロダクション（インタラクション）に関連するものである。これまで、オーラル・イントロダクション（インタラクション）の際に複数枚のピクチャーカードをワードカードとともに左から右へ時系列に黒板に貼っていった。板書はその授業時間中残され、生徒がストーリーの全体像を繰り返し確認することができた。こうした従来の黒板の使い方と、スライド的に情報が提供される電子黒板とをどのように併用するのかについて検討することは、必要な作業であると感じている。

「デジタル教科書を使えば、次々に資料や映像を見せることができ、ねらいに沿って「活用方法を検討」したり活用方法を「見極め」ていくことが必要であると言われている（東京書籍, 2015, p. 2 参照）。大切なことは、「ICT の利点と授業改善の方向性が合致する部分を適切に捉えて活用する」ことであると文部科学省（2020a, p. 81）においても述べられている。「各教科等の特質や ICT を活用する利点などを踏まえて」（文部科学省, 2020a, p. 81）、「これまでの教育実践と最先端の ICT のベストミックスを図」することも謳われている（山口県教育庁義務教育課, 2020a）。

3. 4 これからも変わらず大切にされるべき英語の授業づくりの本質（大切にしたい「変わらないもの」）

最後に、ICT を適切に活用した学習活動の充実が推進されていく中で、これからも変わらず大切にされるべき英語の授業づくりの本質について述べてまとめたい。

まず、「理解してからドリル段階に入り、自動化できるようになってから応用活動に進むという手順は、真のコミュニケーションに近づくための大切なプロセスである」（Nishimura, 1996, p. 4 参照）。「現在は『使用』のところに焦点があてられて」きたが、『使用』に焦点を当てることで、その前の2つ（提示と練習）をサイクルの中に組み入れ、回転するようにならなければならない」と言われている（金田, 1993, p. 41）。「文法事項を学んでは意味ある文脈の中で使い、使っては学ぶといった、理解や練習と実際の使用のサイクルを繰り返す中でコミュニケーションを図る資質・能力を育成していくことが大事である」（文部科学省, 2018c, pp. 93-94）。

「使用」を視野に入れて多量の口頭練習をスピーディーにテンポよく行うことが大切である。「連鎖的に、正確

に」(飯野著・清水改訂, 1985, p. 61) 模倣できるような口慣らし、「意識的練習で練習した文型が無意識に、自動的に、正確に口から出てくるよう」な「自動的練習 (Automatic practice) いわゆる文型練習」(飯野著・清水改訂, 1985, p. 113) も英語学習の手順と技術として必要なものであると考える。

そして、授業の手順は一定の手順をとりつつ、「作業に変化を与えることは興味を起こさせ、疲労を少なくする。そのためにも、指導に変化を与え…リズムのある授業運び」(飯野著・清水改訂, 1985, p. 186) をしていきたいものである。「全部の生徒が全体で英語を大きな声で、そろって、はやく」コーラスで言う choral work と「個人を指名して言わせる individual work」を適切に組み合わせながらテンポよく授業を進め、生徒の「Concentration (集中)」と「Participation (参加)」を確保することが大切である(山家, 1957, 1964; 山家保先生記念論集刊行委員会編著, 2005 参照)。

今回の模擬授業では地図記号がテーマ(話題)であったが、一貫して一つのテーマで進むストーリー性のある授業展開を音から文字へという指導の流れで行っていくことを心がけている。テーマに沿って、学習のつながりを大切に、学習作業を適切な順序に配列し、「一貫性のある、しかも互いに密接な連関関係をもった一連の学習作業」(山家, 1964, p. 23) の手順を「常に一つの system として指導を進めて」(山家, 1957, p. 30) いくのである。

また、目の前の学習者の「表情や発言により理解度を確認しながら、その使用表現やスピードを調節」したり、繰り返したり具体例を挙げたりすることが必要である(又野, 2017, p. 152 参照)。

そして何より教室に英語があふれることはこれからも「変わらない」大切なことであろう。

英語教育に限らず、どの教科、領域においても、「生徒一人ひとりに寄り添って丁寧に指導をしていくこと」(又野, 2017, p. 153)、生徒一人ひとりのよさを見取り、価値づけていくことは大切なことである。

自分の学習経験、指導経験により教師の信条 (teacher belief) は個々に異なることがあったとしても、また、どんなにいろいろなことが進化していったとしても、英語教育に限らず、どの教科、領域においても「変わらない」授業づくりの本質は存在すると考えている。「変わらない本質」に立ち戻りつつ、これからの新しい授業をつくっていききたいものである。

4. 質疑応答

講演の最後に質疑応答の時間が設けられた際に、「英語が苦手な子ども、例えば個人で発話する際にどうしても言えない子どもがいたときにはどのような支援をすればよいのか」といった内容の質問があった。2つのことをお伝えして講演を終えた。

まず、そうした言えない子どもがいないように、「スモールステップ」で「丁寧」な指導(又野, 2015 参照)を一つひとつ積み重ねていくこと、聴く姿勢と授業規律を軸としながら、「Concentration (集中)」と「Participation (参加)」(山家, 1957, 1964; 山家保先生記念論集刊行委員会編著, 2005 参照)を確保し、全体でたくさん何度も繰り返し練習して確認し、全員を言える状態にしていくこと、全員が言えるようになっているかを見極めていくことを基礎的な段階から累積的に行っていることを伝えた。

次に、個別に発話した際にどうしてもその発話が難しかった場合は、そこで再度モデルを示して全体でのリピートを確保した後、再度個にもどしてリピートさせ、成功体験につなげるステップをとることをお話した。その一つの事例として、筆者が小学校を訪問して出張授業を行った際に、最後は上手に言えて「又野先生は、ぼくに勇気を持たせてくれてうれしかった。今度4年生になるけど、4年生でも英語がんばります」ということばをくれた児童との出会いを紹介した。「最初は『できるかな?』と思っていたけど、とっても覚えやすく楽しくできました」「『すごいね、自分で考えたのがすごい。』と言ってくれたのがすごくうれしかったし、考えてよかったです」「はじめはきんちょうしたけどきんちょうがすべて楽しみに変わりました」と手紙に書いてくれた児童もいた。必ず成功体験にして終わるということ、どんな状況でも子ども達を励まし、支持的風土の中で希望を持って英語を学ぶことができるように導いていきたいと考えている。

5. おわりに

参加者の方々の事後アンケートで、「デジタル教科書の活用について模擬授業を通してわかりやすく理解を深めることができた。新しい学びがたくさんあった」「模擬授業では、これからも大切にされるべき英語の授業づくりの本質が見られ、私も授業経験を積むことを通して、先生のようになりたいと思った」「スピーディーで流れがスムーズでとても楽しかった」「授業中の発音練習の工夫や指名方法などについても深く学ぶことができた」「“Good!” や拍手で学習者を賞賛する場面が多く、『言ってくれた』『言えて嬉しい』と感じることができた」「模擬授業では、だれ一人置いていかない授業展開で、テンポの良さはもちろん、ICTの活用と教師の役割どちらもうまく機能していて、参考になる点ばかりだった」「何度も同じフレーズを言うことで、速くもついでいける感覚が新鮮だった」「模擬授業は、今まで見てきた中で例を見ないほど完成度が高いと感じた」「オールイングリッ

シユなのに、難しい表現がほとんど使われていないことに驚いた」等、ICTの活用にとどまらず、授業づくりの本質や授業運びにも気付きが促されていることが伝わってきた。次世代の教員養成に何か一つでも役立つ授業を学生の方々と作り上げることができたのであればとても嬉しいことである。

教職課程の授業では、私自身が何より学生の方々の取組に感動し、幸せな時間だったのであるが、大学の講義を終えた後、帰りのバス停まで2人の学生が見送ってくれた際、「授業、すごく楽しかったです」「将来先生になります」との声を届けてくれた。先生になった彼らにいつか必ずどこかで出会えることを願いながら、英語教師の専門性の養成と研修のために力を尽くすとともに、私自身これからも良い授業を子ども達とともにつくっていくことができるよう努力を続けていきたい。

[資料1 模擬授業の具体]

教材 NEW HORIZON English Course 1 Unit 2 Part 2 知らない人やものについてたずねよう

学習目標 疑問に思うことを知るために、人[もの]がだれ[何]なのかについて、たずねたり答えたりすることができる。

指導細案

授業過程	生徒の学習活動を支援するツール (指導者用デジタル教科書の教科ツール) 電子黒板の画面上でデジタル教科書を操作 ※はデジタル教科書の教科ツール以外の具体物等
<p>1. 模擬授業参加者へのあいさつ I'd like to express my appreciation to you for having me here today. I'd like to share several tips to make studying English more fun for students. From time to time, I'd like to ask you to play the part of the students as I demonstrate the lesson activities.</p> <p>[Are you ready? Class is about to start. Action!] Hello, everyone. I am Yoko Matano, Ph. D. (自己紹介文に本時の言語材料も取り入れる What's this? Who's this? I like ____.)</p> <p>2. 基本文の練習 (小学校外国語活動 (Let's Try! 1 Unit 8 What's this? 及びUnit 9 Who are you? の復習) とめあての確認 Let's review what you studied in elementary school. • Enjoy Communication (小学校で学習した場面と表現) →Mim-mem What's this?—It's a melon. It's a pineapple. It's a strawberry. [I don't know.] Who's that?—She's/He's _____. [I don't know.] what who</p> <p>• Explanation</p> <p>• Question-answering (問答) (注3) クイズ形式 ↓ What's this? —It's the symbol for “_____.”</p>	<p>※clapper board (注1)</p> <p>※絵カード (提示後ホワイトボードへ)、飛び出す絵本 (注2)</p> <p>• シルエット (拡大して提示)</p> <p>• 写真 (拡大して提示)</p> <p>※what who →フラッシュカード ※これは何? これがだれ? →トピックの提示(ホワイトボード)</p> <p>• 基本文の文法解説動画 (拡大して提示)</p> <p>※地図記号 (パワーポイント) school/shrine/temple/hospital/post office/factory/ fire station/library/museum/castle ruins</p>

確認

Is this the symbol for “_____”?

—Yes, it is.

—No, it's not. It's the symbol for “_____.”

• Jazz chants

Let's practice with music.

What's this?

It's the symbol for “school.”

It's the symbol for “temple.”

It's the symbol for “fire station.”

It's the symbol for “museum.”

It's the symbol for “hospital.”

3. 本文の内容理解

オーラル・イントロダクション (インタラクション)

Look at this picture. How many people are there in this picture? Two.

Who's this? It's Kaito. He's a junior high school student just like you.

Who's this? It's Ms. Cook. She's an English teacher.

This is a town map. town map

They're looking at a town map.

Kaito is showing Ms. Cook the map that is on the wall in their school.

What's this?

It's the symbol for “hospital.” symbol

It's the symbol for “museum.”

It's the symbol for “fire station.”

It's the symbol for “school.”

It's the symbol for “shrine.”

What's this?

Is this the symbol for “shrine”?

No, it's the symbol for “picnic area.” picnic area

These two look similar, don't they?

In America, this is the symbol for “picnic area.”

That's interesting. interesting

This is a picnic table.

It's a table and bench combination.

It's a table with benches.

This is a person sitting.

This is another person sitting.

They're sitting at the picnic table together.

They're enjoying a picnic.

It's such a beautiful day.

Who's this? It's Josh. Where is he from?

He's from the Philippines. the Philippines

Now let's listen to their conversation.

• 映像＋音声 (Beat by Beat) (拡大して提示)

• ストーリー・スライド (拡大して提示)

→内容理解の助けとなる視覚資料

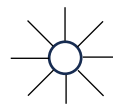
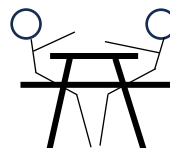
※town map symbol picnic area interesting
the Philippines

→ワードカード

(ワードカードを見ながら生徒は教師のモデルに続いてリピート)

※黒板画

(絵を描き足しながら発話)



the sun

“This is a picnic table...”

※フィリピンの国旗

<p>4. 映像の視聴</p> <p>5. 新出単語の確認と練習</p> <p>6. 本文の音読 Model reading</p> <p>Choral reading Choral-Individual-Choral reading Buzz reading Individual reading Read and look up</p> <p>7. 本文の場面に基づいた言語使用 (場面の再現。地図上の地図記号を見ながらの 実際の対話。) Form pairs and make a dialog about the map symbols on p. 22. A: What's this? B: It's the symbol for "___." A: I see./Really?/Thank you./That's cool./Amazing! I didn't know that./etc. →closed pair work から open pair work (発表) へ →ALT 来校時のリアルな言語使用へつなげる</p> <p>8. まとめ (Writing) と振り返り Write correct sentences from your dialog.</p> <p>Let's think about today's class. Please write what you learned today.</p> <p>9. あいさつ That's all for today. Goodbye, everyone.—Goodbye, Ms. Matano. Did you have a good time?—We did! [Cut! This is the end of the class.]</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 映像+音声 (+字幕) (拡大して提示) →直接的にかつ即時に内容の把握を図る • フラッシュカード (拡大して提示) 「もう 1 回」 で繰り返しモデルの音声提示 「音声 OFF」 で生徒のみで発話 「手動」 で速さを調節 (速く提示) →スピーディーな授業展開 英文を素早く読む力 • 映像+音声 (+字幕) (拡大して提示) • 「1 文」「選択」「スラッシュ」「日本語訳 ON」 「音調」 (拡大して提示) (チャンク単位の音声再生) (音声読み上げ部分の文字の色の変化 →音声にあわせてテキストがハイライト。 カラオケ表示) • ストーリー・スライド (拡大して提示) • p. 23 Your Turn を提示 (拡大して提示) p. 163 町[town]を提示 (拡大して提示) ※振り返りシート <p>※clapper board</p>
---	---

↑

- 「地図記号」という一つのトピックで練習から使用までをつなぐ
- 小学校との接続に留意しながら学習内容の定着・発展を図る

[資料2 講話資料]

デジタル教科書の位置付けについて

①主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点から

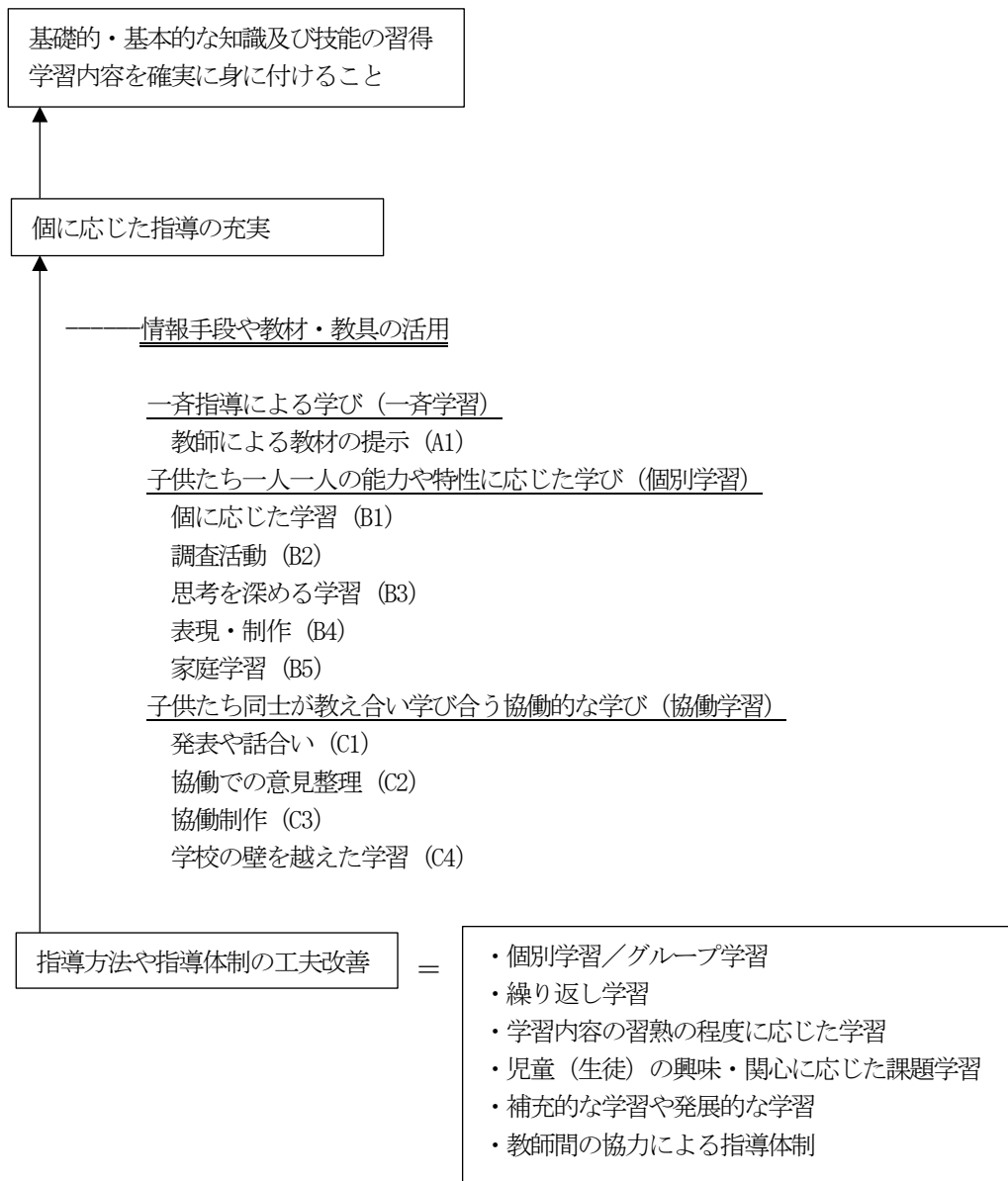
学習の基盤となる資質・能力

言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等

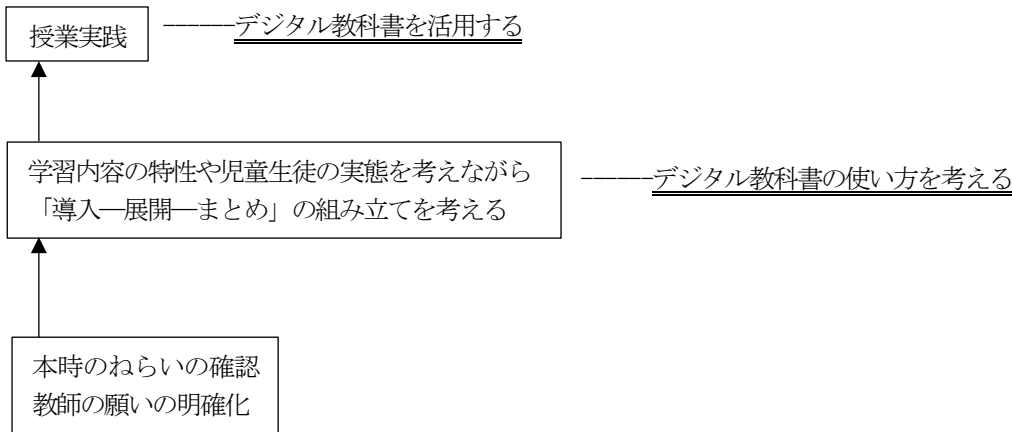
(中学校学習指導要領 第1章 総則 (文部科学省, 2018c, pp. 111-117 「付録2」 参照))

情報活用能力

- ・学習の基盤となる資質・能力
- ・各教科等の特質を生かし教科等横断的な視点から育成するもの
- ・各教科等の特質に応じて適切な学習場面で育成を図ることが重要
- ・育まれた情報活用能力を発揮させることにより、各教科等における主体的・対話的で深い学びへとつながっていくことが一層期待されるもの
- ・人々のあらゆる活動に今後一層浸透していく情報技術を手段として学習や日常生活に活用できるようにするため、各教科等においてこれらを適切に活用した学習活動の充実を図ること



②授業設計の視点から



『ICT活用実践事例集』Vol. 7（東京書籍，2015，pp. 2-3）に基づいて作成

指導者用デジタル教科書の教科ツール活用の利点（本時の授業に関連して）

- ・「同時に見るといふ…共通経験」「同時に共通の学習資料や経験を提供できる」（「同時性」）
→クラス全員の視線が上がり視線が同じ箇所に集まる
 - ・「見せたいところだけ大きく見せる」（「拡大性」→見せたい資料の拡大提示へ）
→「1つの資料に集中でき…資料の細かいところまで気付きを共有」（東京書籍，2015，p. 4）
注目すべき箇所の明確さと見えやすさ（授業におけるユニバーサル・デザイン）
 - ・音声や動画の収録
→映像により目的・場面・状況をつかみながら言語材料を導入
題材に関連した動画の視聴により教科書本文の内容の把握が容易になる
外国の日常生活や風景の映像の視聴が現実感や臨場感を生み出す
「外国の風景や物を、動きを伴うイメージで視聴させることで、生徒の興味・関心を喚起」（文部科学省，2019，p. 31）（「空間および時間の拡大」）
スラッシュで区切ったチャック単位の音声再生やカラオケ風にテキストをなぞる機能
活動のモデル動画により活動のイメージを持たせる
ネイティブ・スピーカーによる文法解説や発音口型を示す動画が発音時のモデルとなる
 - ・「繰り返し見せる（「反復性」）、途中で止める、音声を消すなど、見せ方のアレンジ」（東京書籍，2015，p. 4）も可能
- ※「同時性」「拡大性」「空間および時間の拡大」「反復性」は飯野著・清水改訂(1985, 200-202)において述べられている従来の個々の視聴覚教育機器の特性。「デジタル教科書には、たくさんの機能があり」「すぐに必要な機能呼び出せる」（東京書籍，2015，p. 2）

ICT活用の際の留意事項

- ・機器の不具合への対応を見据えておく
- ・各生徒の表情、反応が見え、それに応じた発話や指導ができる教師の位置（向き）
- ・スライド的に情報が提供される電子黒板とその授業時間中残され生徒が繰り返し確認できる従来の黒板の併用のあり方についての検討——オーラル・イントロダクション（インタラクション）の際の複数枚のストーリー・スライドの提示に関連して
- ・「ICTの利点と授業改善の方向性が合致する部分を適切に捉えて活用する必要がある」（文部科学省，2020a，p. 120）
ねらいに沿って「活用方法を検討」「見極め」（東京書籍，2015，p. 2）
- ・「各教科等の特徴やICTを活用する利点などを踏まえて」（文部科学省，2020a，p. 81）、「これまでの教育実践と最先端のICTのベストミックスを図る」（山口県教育庁義務教育課，2020a）

これからも変わらず大切にされるべき英語の授業づくりの本質（大切にしたい「変わらないもの」）

- ・提示—練習—使用のコミュニケーションサイクル（金田，1993，pp. 40-41；又野，2017，p. 89，2021，p. (3)）

「文法事項を学んでは意味のある文脈の中で使い、使っては学ぶといった、理解や練習と実際の使用のサイクルを繰り返す」(文部科学省, 2018c, pp. 93-94)

- ・「使用」を視野に入れて多量の口頭練習をスピーディーにテンポよく行うこと
「連鎖的に、正確に」(飯野著・清水改訂, 1985, p. 61) 模倣できるような口慣らし
「無意識に、自動的に、正確に口から出てくるよう」な「自動的練習 (Automatic practice)」(飯野著・清水改訂, 1985, p. 113)
- ・「リズムのある授業運び」(飯野著・清水改訂(1985, p. 186)
「Concentration と Participation」 「Individual Work と Choral Work」 「大きな声で、そろって、はやく」(山家, 1957, 1964; 山家保先生記念論集刊行委員会編著, 2005 参照)
Our class motto is “Speak loudly, quickly, and together.” (又野, 2019, p. 53)
- ・一貫して一つのテーマで進むストーリー性のある授業
音から文字へ、テーマに沿って、学習のつながりを大切に、学習作業を適切な順序に配列
「一貫性のある、しかも互いに密接な連関関係をもった一連の学習作業」(山家, 1964, p. 23)
「常に一つの system として指導を進めて」(山家, 1957, p. 30) いく
- ・目の前の学習者の「表情や発言により理解度を確認」→「使用表現やスピードを調節」、繰り返し、具体例の提示(又野, 2017, p. 152 参照)
- ・教室に英語があふれること
- ・「生徒一人ひとりに寄り添って丁寧に指導をしていくこと」(又野, 2017, p. 153)、生徒一人ひとりのよさを見取り、価値づけていくこと。

【注】

1 「カチンコ」(内田洋行)

2 やなせたかし原作、ひろせかおる考案、TMS 作画 (1999) . 『アンパンマン ミニ・ポップ①いない いない ばあ!』東京：株式会社フレーベル館。

3 技法や指針については以下を参照。

Palmer, H. E. (1931). *The technique of question-answering*. Tokyo: IRET. (語学教育研究所編. (1999). 『パーマー選集国際版』第4巻(本の友社)に収録 (pp. 161-257.))

Palmer, H. E., & Palmer, D. (1925). *English through actions*. Tokyo: IRET. (語学教育研究所編. (1999). 『パーマー選集国際版』第3巻(本の友社)に収録 (pp. 1-387.))

【参考文献】

Nishimura, S. (1996). A reconsideration of pattern practice: From imitation to communication. Unpublished master's thesis, Yamaguchi University, Japan.

飯野至誠著・清水貞助改訂. (1985). 『英語の教育<改訂版>』東京：株式会社大修館書店。

笠島準一・阿野幸一・小串雅則・関典明他. (2021). *NEWHORIZON English Course 1*. 東京：東京書籍株式会社。

金田道和. (1993). 「コミュニケーション能力を育てるための英語の授業」『平成6年度研究集録』第18集. pp. 37-48. 山口：山口県中学校教育研究会英語部会。

東京書籍. (2015). 『ICT活用実践事例集』Vol. 7.

名和雄次郎・関典明. (1987). 『中学英語の指導技術<意欲を高める工夫と実践>』東京：ELEC.

又野陽子. (2015). 「初任者研修における示範授業が初任者に与える気づきに関する事例的研究」*YASEELE* (山口大学英語教育研究会紀要), No. 19. pp. 19-31.

又野陽子. (2017). 『中学校英語サポートBOOKS はじめてのオールイングリッシュ授業—今日から使える基本フレーズ&活動アイデア—』東京：明治図書出版株式会社。

又野陽子. (2019). 「英語で行う英語の授業づくり」『語研ジャーナル』第18号. pp. 53-59. 東京：語学教育研究所。

又野陽子. (2021). 「生徒の言語活動を促す授業づくり」『英語教育』12月号. pp. (3)-(4). 東京：株式会社大修館書店。

文部科学省. (2018a). 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』東京：開隆堂出版株式会社。

文部科学省. (2018b). 『新学習指導要領対応 小学校外国語活動教材 *Let's Try! 1*』東京：東京書籍株式会社。

文部科学省. (2018c). 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』東京：開隆堂出版株式会社。

文部科学省. (2019). 『学習者用デジタル教科書実践事例集』
文部科学省. (2020a). 『教育の情報化に関する手引—追補版— (令和2年6月)』
文部科学省. (2020b). 『各教科等の指導における ICT の効果的な活用について』
山口県教育庁義務教育課. (2020a). 『1人1台端末を活かした新たな学びの実現に向けて』
山口県教育庁義務教育課. (2020b). 『教科等の指導における ICT の活用』
山家保. (1957). 『Pattern Practice と Contrast—新しい英語の学習指導法—』東京: 開隆堂出版株式会社.
山家保. (1964). 『新しい英語教育』東京: 財団法人英語教育協議会.
山家保先生記念論集刊行委員会編著. (2005). 『あえて問う 英語教育の原点とは』東京: 株式会社開拓社.

【付記】本稿は、令和5年10月14日 LRT 令和5年度第1回セミナー (山口学芸大学)、令和5年12月21日 教職課程「英語科教育法Ⅰ」(梅光学院大学)、令和6年2月15日「英語科教育法Ⅰ集中講義」(梅光学院大学) における講演、講義の内容に基づいている。

(山口市立大内中学校)